

たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No. 36 平成8年2月15日



発行
財団法人東京都教育文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市落合
1-14-2
☎ 0423-73-5296
平成8年2月15日



汐留遺跡の現地説明会 平成7年11月18日(日)に開催したところ、1,250名もの多くの
参観があり、市民の文化財への関心の高さがうかがえた。

埋蔵文化財保護の立場から

調査研究部長 佐藤 攻

当埋蔵文化財センターにおいて、現在発掘調査を実施している遺跡は、都内各地に分散している。

多摩ニュータウン地区では、縄文時代早期の集落や、古墳時代の集落などの調査を行っている。

江戸時代の大名屋敷等の調査を手がけて五年目となった。土佐藩上屋敷跡・徳島藩上屋敷跡の調査を行い、尾張藩上屋敷跡・龍野藩上屋敷跡・仙台藩上屋敷跡・会津藩中屋敷跡などの調査を継続中である。

武蔵野台地上の調査では「東山道武蔵路」の発見が新聞報道された。

遺跡の調査は、掘ってみなければ、実際に何が出てくるかわからないという点において、夢がある面と、直接生活に関連する開発行為に影響がある点との整合性をはかるとともに、大いに苦労がある。このことについては、直接に調査を担当している者にとっても、開発事業者においても同様な悩みを持って、それぞれの立場に立って対応している。

埋蔵文化財の保護として、遺跡の調査を行い、また遺跡の保存を行うことに対して、より良い方法をさぐり出すためにも、住民や市民、開発事業者、行政と調査担当者の三者の理解と協力が必要であることはいままでもない。

遺跡だより ④5

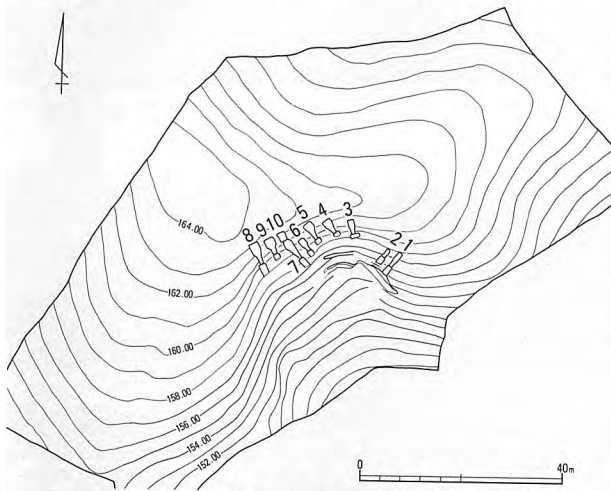


多摩ニュータウン遺跡群の調査は、現在、多摩丘陵南縁部の相原・小山地区に移っています。この地域の遺跡内容は、相模野台地を控えた立地条件もあつてか、丘陵の内部では見られなかった性格・規模の遺跡が見られ、注目されています。

そのなかで町田市小山に所在するNo.192遺跡は、多摩丘陵南辺に沿って流下する境川の支流に開析された谷戸の、最深部斜面とその尾根部にまたがっています。昨年、その斜面部から予測もしなかった横穴墓が10基群集して発見されました。

横穴墓は、関東地方では7世紀を中心にして造られた墓ですが、いわゆる墳丘を持つ古墳とは違って、丘陵などの急斜面や崖に築かれています。まず墓前域（前庭部）を掘りこ

み、その奥に墓室を穿ったものです。一般的なありかたは、墓室に礫を敷きつめて遺骸を安置し、その後、墓室の入口を石積みして閉塞します。本横穴墓群は関東ローム層に掘りこまれています。後世の地崩れ等にあつて墓前域が失われたものや、すべて墓室で天井から側壁が崩落するなど、遺存は良くありませんでした。しかし墓室床面の残りが良かったため、1号墓で鉄鏃10点と刀子1点、5号墓で刀子1点とガラス小玉40数点、金環2点、6号墓で刀子1点、7号墓で小刀1点と刀子1点、金環2点が出土しました。これらの副葬された品々から、被葬者の社会的地位をうかがうことができます。



No.192遺跡横穴墓群地形図

なお、4・5・9号墓から人骨が出土しましたが、断片のため性別や部位を特定するには至っていません。横穴墓は、副葬された土器が編年の指標となり年代が特定されますが、墓室には残されていませんでした。ただしこの場所の斜面下から、副葬された品である7世紀後半代の、東海地方産の須恵器片が出土しています。また、構築された標高等から、横穴墓は4群程度からなり、その一部が重複しており、比較的長い期間営まれたものと思われれます。

このような横穴墓群は、在地の有力な特定氏族によつて造られた家族墓といわれています。何群かが集まつて水系単位に分布する傾向も認められます。本遺跡の至近では、No.939・951・954・328遺跡等で1から3基の小規模な横穴墓が確認されています。そのほかにも本遺跡の南方で相模野台地の崖線には、相模原市御所之入・町田市根岸山横穴墓群の存在が知られています。

今後、これらの横穴墓群との内容の比較や埋葬を行った集落（集団）の特定なども含めて検討することに、当地域の古墳時代後期後半の生活状況や、社会情勢が明らかになっていくでしょう。

（竹花宏之）

▽シンポジウムだより△
縄文中期集落研究の新地平

昨年末の十二月九・十日に当センターの会議室において、右の題名のシンポジウムが開催されました。両日とも、若い世代の研究者が100名も参加して、このテーマへの関心の高さがうかがえました。

都内ではこれまで、数多くの縄文集落が発掘調査されてきました。それらの調査に基づいた集落研究の到達点・問題点を明らかにしながら、具体的にはどのような調査をすれば何が分かるのか（遺物の取り上げ方法と資料分析）、住居跡の調査で得られる情報（住居型式）とは何かなどの視点から、事例報告と活発な討議が繰り広げられました。

今回の成果は、今後の調査研究に、十分に反映されていくことでしょう。

（小薬一夫）



シンポジウム風景

文化財講座 <26>
大江戸掘りもの帖 ~ 其参 ~

台地上にある屋敷の移り変わり
幕府が開かれて以降、江戸の町は
大名・旗本等の武家屋敷をはじめ、
町屋・寺社などで構成されていまし
た。江戸の町を形成するにあたり、
広い平坦な場所を確保する必要から、
山を削り谷を埋め、自然地形を改変
しています。なかでも大名屋敷は、
藩主とその家族や家臣、奉公人たち
が居住するために、かな
りの面積を獲得していま
す。それも、時代が下が
るにつれて江戸市中から
周辺にも屋敷地を求めて
いきます。



尾張藩東御殿の表玄関付近

以降、この台地が急に活況を呈して
いきます。屋敷地の移り変わりを辿っ
てみますと、次のようです。

尾張藩上屋敷跡遺跡が
立地するのは、武蔵野台
地の東端で淀橋台の一角
をなす四谷台です。

正保元(1644)年以前、当地は、
板倉周防守下屋敷や森川金右工門の
同心屋敷であり、東側には法性寺を
はじめ、いくつか寺院がありました。
明暦二(1656)年になり、この
場所を尾張藩が上屋敷として拝領し
ます。上屋敷の敷地は、当初、板倉
周防守下屋敷、同心屋敷を含めた六
万坪余でしたが、その後、法性寺な
どが加わり拡張していきます。

南側の谷には現在靖国通りが走っ
ていますが、かつての紅葉川が開析
したもので、急峻な崖になっていま
す。東側にも長延寺谷と称されてい
た支谷が入っており、全体として遺
跡は、西から東に延びる東西が800m、
南北が400m、標高が30mほどの舌状
台地を占有する形になっています。

明和四(1767)年になると、世
子と同居するには屋敷が狭すぎると
いう理由で、尾張藩は屋敷地の拡張
を幕府に願ひ出ます。こうして最終
的には、出雲広瀬藩上屋敷二万四千
坪余を得て、総坪数が八万坪余もの
広さとなりました。(甲崎光彦)

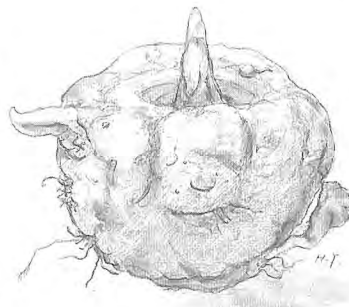
支谷が発達しているのです、湧き水
があつて、飲料水の確保も容易だつ
たようです。

さて、家康が江戸に入府してから

遺跡庭園の四季 ①

十一月末に、秋の庭園の情景を撮
影しようとして、隣のビルの屋上に立ち
入らせて貰ったものの、復元住居は
育った樹木に遮られて見えなくなっ
ていました。それがいまではすつか
り葉が落ちて、このセ
ンターの窓からも、住
居が木々の枝越しに垣
間みられます。

復元住居は十年経つ
てかなり老朽化してき
ました。週に一度、屋
内の炉で焚き火をして
は防湿、防虫に努めて
きましたが、土間に接する柱の根元
が朽ちはじめ、屋根の萱も痛んでき
ました。おそらく縄文時代の堅穴住
居も、常日頃、火を焚いてはいろい
ろ養生されたにしろ、十五年ほどで
建て替えられたのでしょう。



冬に入つてこのかたほとんど雨が
なく、庭園は乾ききつてひっそりと
息づいています。いま庭園のワラビ・
ゼンマイ・カンゾウ・吾亦紅などは、
霜枯れに耐えながら春を待ちかねて
いるところです。

冬に入るまえに蒟蒻薯
を掘り出しましたら、何
と径が15センチ、重さが
15キロもありました(図)。

それから収穫した里芋
と荳胡麻ですが、荳胡麻
をかるく煎ってから丹念
に搗鉢で搗って、醤油に
味醂と砂糖を加えてねっ
とりと仕上げ、熱々に蒸した里芋に
つけて試食してみました。じつに香
ばしい荳胡麻の風味に、職員一同が
舌鼓を打つたものでした。
寒さひとしおきびしい候、くれぐ
れもご自愛ください。(安孫子)

●遺跡調査研究発表について

第21回東京都遺跡調査研究発表会
が二月四日(日)に、江戸東京博物
館ホールにおいて開催されました。

●展示ホール休館のお知らせ

現在、展示中の「5万年をさかの
ぼる自然とヒトの歴史」は、三月三
日(日)に終了し、三月四日(月)
から九日(土)まで、平成八年度の
展示替えのため休館になります。

当センターからも、今年度の最も
注目すべき成果として多摩ニュータ
ウンNo.200遺跡を、調査担当した及川
良彦・田中純男・大西雅也の三名が
発表しました。

三月十日(日)からは、新たな企
画として「縄文中期・多摩のむら」
と題した展示になります。



15周年記念講演会の開催

十一月二十五日(土)午後一時から四時半まで、国立駅前の多摩中央信用金庫国立支店の会議室を会場として、「多摩ニュータウンと東京の考古学」の講演会を催しました。

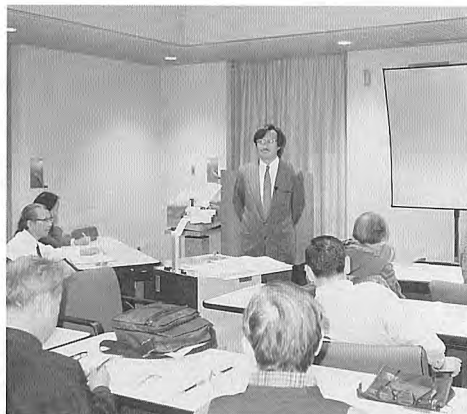
当日の講演は、石井則孝所長による「多摩ニュータウン発掘の成果と展望」および前調査研究部課長補佐で教育庁文化課埋蔵文化財調整係長の可児通宏氏による「新しい縄文文化像を探る——多摩ニュータウン遺跡30年の成果」の二本立てでした。120余名もの大勢の参加者が、多摩ニュータウン遺跡の重要性と素晴らしい研究の成果に、熱心に耳を傾けていました。

定例文化財講座の開催

十月十四日(土)に、当センター安孫子昭二による、第3回文化財講座「縄文時代の植物食」の講演と、映画「森と縄文人」を上映しました。参加者は90余名を数えました。

同じく第4回として、十二月二日(土)に、東京学芸大学木俣美樹男教授による「雑穀の栽培と調理」の講演と、映画「奈良田の焼畑」を上映しました。木俣氏は、日本全国およびユーラシア大陸で実践されてきた豊富なフィールドワークを基に、雑穀の種類とその系譜あるいはその味覚などについて、スライドをまじえて懇切に解説されました。

世界の民族の食文化に占めてきた雑穀の役割とその重要性に、80余名の参加者一同感銘をうけました。



講演される木俣教授

汐留遺跡の現地説明会

十一月八日(土)に催しました。好天に恵まれ、大勢の参観者で賑わいました。巻頭写真を参照ください。

海外研究者の視察と講演

十月三日(金)および一月二十六日(金)の二回にわたり、「東アジアにおける土器の起源に関する国際共同研究」で来日した、ロシア、中国の左記の研究者がセンターを来訪。

多摩ニュータウンの遺跡と遺物を視察し、併せてそれぞれの研究テーマを講演され、当センター職員と意見の交換を行いました。

ジュシチホフスカヤ I,S(ロシア連邦極東歴史・民族・考古学研究所) 焦天竜(中国社会科学院考古研究所) 蒋廷瑜(中国广西壮族自治区博物館)

分室だより

市ヶ谷分室 西御殿の一部にあたる26・27の地点では、建物の礎石跡の下から、尾張藩の拝領以前と考えられる地下室が、30数基も検出されました。25地点では、現在の地表面から5mも下で、木樋が出土しました。西国分寺分室 恋ヶ窪南遺跡に隣接するB地点で、これまでに類例のない、径100cm、深さ120cmほどの縄文時

代早期後半の筒形の土坑が、30数基もまともって検出されています。住居跡や炉穴もあります。日の出分室 真冬の澄んだ空気が、奥多摩の山々の稜線をくっきりと浮かび上がらせています。古墳時代後期の住居跡群の調査がほぼ終わり、その下の縄文時代の土坑の調査に入っています。



1辺が11mの大形住居跡。正面奥に竈があり、周辺からは土器類が、手前に編物石が出土している。

板橋分室 新しい年を迎え、気持ちも新たに整理作業を進めています。今月からは縄文時代の土器の整理も始まって、手狭になった整理場に、いつそう活気がみなぎっています。汐留分室 龍野藩・仙台藩の屋敷地に加え、会津藩中屋敷の調査に着手。現在、仙台藩の御殿を中心に建物の礎石や間知石によってできた排水溝などを、広範囲に発掘中。